朝日小学生新聞賞

ありがとうの気持ちを伝えたい

福岡県　明治学園小学校 四年
野入 桃子

学校から帰ると、私はその日にあった出来事を母に話す。母は私の話を笑ったり怒ったり困ったりしながら聞いてくれる。そして、話の最後に必ず笑顔でこう言うのだ。

「学校生活を楽しんでね。」

母は二才の時に家が火事になって大火傷を負った。病院に入院して何度も手術を受けたそうだ。当然、学校に行けるはずがない。病院の中にある学校と書かれた部屋に通っていた。病院内の学校は、病気やけがで入院している子ども達が学習をする場所だ。時間割りはなくて、それぞれが出来る時間で出来る課題に取り組む。母は火傷で手が動かなかったので、えんぴつが持てなかった。だから本ばかり読んでいたそうだ。顔も焼けていたのに、母の目が見えなくなっていなくて良かった。もう過去のことかもしれないけれど、私は神様に感謝している。もしも母が死んでしまっていたら、私は母に会うことが出来なかったのだから。それよりも、そもそも私という人間も存在しなかったのだ。

当時、母はその見た目で心無い言葉をたくさん浴びた。いっぱい泣いて、「こんな思いをするくらいなら火事の日に死んでしまえば良かった」と何度も思ったのだそうだ。大変な思いをした母は、命の大切さを知っている。思いやりも知っている。「助けてもらった命には意味があるはず」そう気がついた母は、勉強とリハビリを続けて看護師になった。子どもの時に自分が助けてもらった分、今度は困っている人を助けたかったのだそうだ。

母は私に「宿題しなさい」とは言うけれど、「勉強しなさい」とは言わない。学校、友達、ほかにもたくさん、普段の生活からいろいろな経験をして学んでほしいと言うのだ。確かに人の気持ちを思いやることや、今ある状況を判断して動くことは、教科書にはのっていない。そして、これらは教えてもらって身につくことじゃない。経験から考えて、自分で学びとっていくものなのだ。

夢を見た。私のクラスに転校生として、小さい頃の母がやって来るのだ。母の顔と手は包帯でぐるぐる巻き。クラスのみんながざわつくけれど、私はそんなこと気にしない。母が幼い頃に思い描いたように、普通に学校に通って普通に友達として遊ぶのだ。包帯で母の顔を見ることは出来ないけれど、母が笑っているのが私にははっきりとわかるだろう。

母の生い立ちを聞いて、私は自分が恵まれていたことに気がついた。学校にいけること、友達と遊べること、ご飯を食べられること、安心して眠れること。当たり前と思っていたことが、本当は当たり前じゃなかった。普通と言われるそれは、とても幸せなことだったのだ。私に関わる全ての人へありがとうの気持ちを伝えたい。そして母へこう言いたい。

「私のお母さんでいてくれて、ありがとう。」

評価のポイント

「当たり前と思っていたことが、本当は当たり前じゃなかった」という言葉に考えさせられました。大人・子ども関わらず多くの人に読んでほしい作品です。